

山姥の卒論



木村 マサ子

(函館市)

「木村さん、函館山へ行って見ないか…」と上司

の勤めがあり、「専門的なことはできないが、函館山に興味を持つようにはできるかもしれない」と、1991(平成3)年5月から函館山ふれあいセンターの自然観察指導員として勤めることにした。

函館山に勤める前の1985(昭和60)年の夏、阿寒湖畔で開かれた一歩園大学で「自然は全ての関わりで見ると習っていたこともあり、ふれあいセンターに勤めるやその実践をしようと考えていた。実際に勤めを始めると、函館山に関わる資料は動植物に関するもの程度しかなかったので、自分も勉強しながら、市民に四季を通して函館山の自然を体験体感してもらうよう「函館山自然体験教室」を企画し案内した。

函館山(標高334m・面積326ha)を遊び場として育った私は、どこにどんな花が咲き、実がいつ成るか、要塞跡や道路工事で山が削られたことも記憶に残っていた。これらが現在の函館山の自然を創り出していることだと考え、函館山での解説のために資料集めをすることにした。函館山の歴史と自然を知るとは、函館市民も「函館山を好きになり、函館山の自然を大切に考えるようになる」のではと思われた。さらに、ふれあいセンターを函館市民の拠点にもしたかった。

春の芽吹き頃と秋の落葉期は、函館山の中は視界も良く歩きやすいため、毎年全コースの確認と周辺の藪こぎ観察を続け、「山姥」とも呼ばれた。この活動は思わぬ巨木や施設跡を発見することに役立ち、これらを知る資料は函館中央図書館の郷土資料の中から調べることができた。函館山を歩き回り調べるほど、これほど人々の生活と関わりながら姿や高さを変えられた山はないのではと思ひ、その元の姿を見たいと思うようになった。

全盲者に函館山のことを知ってもらうため「触れる模型図」を作った際は、この模型が函館山を紹介するのに役立つことがわかり、どこにでも持ち歩いて解説に利用した。また、要塞工場の施設跡を探すために「明治32年函館要塞築城計画図の模型」を作った際もその現場を確認するのに大いに役立った。この地図の中に、要塞工事前の函館山が載っていたのだ。現在、私たち市民が眺めている函館山は、1897(明治30)年から始まる函館要塞工事で12の^{がきゅうざん}コブ山の山頂を削り取られていて、かつて「臥牛山」と呼ばれた姿は無くなっていることを知ることができた。

勤めて13年が経つ2004(平成16)年3月に函館山ふれあいセンターを辞めたが、この間に集めた資料で部屋はいっぱいになっていたが捨てきれないでいた。私が現場を歩き回って集めた体験的



写真1 1877(明治10)年頃の函館山。写真左の黒い森は、1801(享和元)年「船を造る際、船100石に対しマツ・スギ・トド・センノキ各100本の植林」が義務づけられ、1803~1854年に植えたもの(現存)。右の黒い森は、1810(文化7)年倉山卯之助が「成木になったら半分わけする」と幕府と約束して植えたもの(現存せず)。写真中央の建物は裁判所、右端はロシア正教宣教師館、横にハリストス教会の尖った屋根が見える。この写真に映る森は北海道でのカーボンオフセットの最初ではと云われている。函館中央図書館所蔵



写真2 1953(昭和28)年全容を現した函館山。要塞工事で山頂が13m削られていた。楕円は砲台跡で、現在はこの上に展望台が建っている。1953年村井雄二郎氏撮影。

な資料は、誰もが経験できない貴重なものとは思ひ整理していた。幸いにも、それらをまとめたガイドブック製作の打診があり、その計画に安易に乗ったものの、函館山らしい解説を織り込むに4年が掛かってしまった。

このたび、「お前、そんな山を本当に見たのか」と言われそうな歴史展開を紹介することになりそうだ。それらの歴史跡は現場の山中にあり、今のところそれ以上の資料を探せない。このガイドブックは「山姥の卒論」になると思っている。